

SDGsと縄文時代の生活様式

千葉県教育庁教育振興部文化財課指定文化財班班長 **吉野 けんいち**



千葉県マスコットキャラクター
チーバくん

SDGs (Sustainable Development Goals) は、2015年9月の国連サミットにて全会一致で採択された「誰一人取り残さない」持続可能でより良い社会の実現を目指す世界共通の目標で、17のゴール(目標)が示されている。

最近、SDGsと縄文社会を関連づけて紹介する記事等を目にする。縄文時代の人々が有用な樹木の林を管理していたこと、廃物のリサイクルが進んでいたこと等を掲げて、縄文時代の生活様式が持続可能な社会を実現したことで、約10,000年もの間、繁栄をつづけたという内容である。

房総半島は全国で最も縄文文化が繁栄した地域であると言っても過言ではなく、貝塚数については全国1位である。特別史跡加曽利貝塚の事例をみると、縄文社会が持続可能な社会であったという意見は説得力を感じる。しかしながら、1万年にわたり繁栄が続いたかということ必ずしもそうではない。

その一例として、房総半島における貝塚数が最初に最も多くなる縄文時代早期後半の状況について紹介しよう。縄文時代早期は、約11,000年前から約7,000年前までで、この期間はおおむね縄文海進の前半期にあたる。縄文海進と貝塚の関係について簡単に説明すると、寒冷であった旧石器時代から縄文草創期が終わり、温暖な時代が到来すると、地上にあった氷河が溶けて海に流れ込み海水面が上昇したことで、縄文時代前期後半ごろまでにたくさん入江が誕生し、入江の周辺に多く

の貝塚が形成されたということである。この説明は概ね正しいが、詳細にみると、必ずしもそうではない。海進により海水面は徐々に上昇するが、貝塚の数は、早期後半の約8,400年前の後の約900年間に急増するのである。この時期は、それまで続いた温暖な気候が一時的に寒冷化し、海進がストップした時期だと考えられている。「寒冷化した」と聞くと自然環境が悪化したと感じるが、実際には貝塚が増え、大規模な集落が形成されている。この期間は意外にも縄文人にとって快適な時期だったのだ。そして、その後、再び温暖化して海水面が上昇するのだが、その後の時期には房総半島にはほとんど人類の痕跡が認められなくなるのだ。縄文人にとって暮らしにくい土地になったのに違いない。

ここで、私たちが住む今日の世界を振り返ると、現代はまさに温暖化と海水面の上昇が進行している最中で、度重なる台風や豪雨にさらされている。縄文海進期も嵐による災害が頻発する時代だったのかもしれない。この事例のほかにも房総半島の縄文時代には、何度も栄枯盛衰が見て取れる。

縄文時代の人々は、1万年の間に、このような過酷な時期を何度も潜り抜けてきた。その時代の気候や環境の変動に即して住む場所や生活様式を変えながら順応し、生き延びてきた。縄文時代の持続可能な生活様式は、過酷な自然環境の変化に順応する中で、人々が命を持続させてきた結果なのだと感じる。

千葉教育 蓮 (No. 674) 令和4年6月23日発行

編集・発行

千葉県総合教育センター (代表) 神子 純一

〒261-0014 千葉市美浜区若葉2-13

TEL 043-276-1204

URL <https://www.ice.or.jp/nc/>

印刷所

千葉市療育センター いずみの家

〒261-0003 千葉市美浜区高浜4-8-3

TEL 043-216-2465